

# 私学の魂

啓明学園  
中学校・高等学校



**1940年の創立以来、帰国生と共に学ぶ「元祖・多国籍校」。**  
**帰国生と一緒に過ごすことで、自然と身につく国際性と**  
**豊富な体験のなかで磨かれる健やかな感性は、**  
**生徒たちの人生を豊かにする学校生活の大切な宝物!**

1940（昭和15）年に創立した啓明学園。教育理念に掲げる「広い視野のもと、豊かな人間性と独自の見識を持ち、世界を心に入れた人を育てる。」を現在も大切に受け継ぎながら、“世界を生きる”人材となる生徒たちを育成しています。

敷地総面積はおよそ10万㎡と都内最大級を誇り、グラウンド・体育館は各3つ、テニスコートや野球場のほか、田んぼや桃園なども併設されています。誰もが羨むような自然豊かな環境のもと、のびのびとした学校生活を送ることができます。

生徒たちが毎朝くぐり抜ける正門は和風建築の数寄屋造り。さらに東京都の有形文化財指定を受けている、築120年の「北泉寮」と隣の日本庭園は、四季折々の色彩を放つ落ち着いた空間で、日本の奥深い文化や伝統を体感でき、大きな魅力となっています。

校地の奥には、動植物が多く生息する森が広がり、理科の授業では隣接する多摩川も含め、周辺地域を活用した観察や実験が積極的に行われています。

学校見学に訪れた受験生家族や近隣住民も一目で惚れ込むというその環境だけでなく、先駆者的存在の国際性豊かで魅力あふれる授業内容などは、時代がやっと追いついてきた感があります。創立以来75年にわたり培われてきた懐の深い啓明学園の教育や学校生活の一端をご紹介します。



理事長 内藤洋介先生



学園長 北原都美子先生

## 日本、世界を知り、 多様性の中で育つ教育で 能動的な姿勢を養う

校内の至る所で、生徒たちの弾けるような笑い声が響く啓明学園。耳を澄ますと、英語で会話している生徒、高校では中国語で話している生徒の姿も見受けられます。

それもそのはず。同校には、約30パーセントという高い割合で「国際生」つまり帰国生、二重国籍、外国籍の生徒たちが在籍しています。出身国は、アジア、オセアニア、南北アメリカ、ヨーロッパ、アフリカと世界の各エリアがカバーされており、さまざまな世界の文化を身近に感じられる環境があります。

この国際性豊かな校風と創立の経緯について理事長の内藤洋介先生は「本校は、三井家総本家第11代目三井八郎右衛門の実弟である三井高維先生と妻の英



学園空撮。約3万坪の広大な敷地。脇を多摩川が流れ、四季折々の変化を感じさせます。

子先生により、1940年に創立されました。その時代は第二次世界大戦の戦時に向かう最中にあり、諸外国の文化は悪として否定されていたころです。三井先生のお子様をはじめとした、海外帰国子女を受け入れる学校は皆無に等しかったといえます。さらに創立当時からキリスト教主義に基づき、『国際的に平和を作り出す人間の育成』として平和の大切さを説く教育を行っていたため、軍部からも睨まれる存在であり、当時は廃校の危機もあったそうです」と言います。

8名の帰国生と13人の先生という小規模な体制からスタートした啓明学園ですが、個を尊重し一人ひとりを大切に見守る温かみのある教育は、現在も変わらず継承されています。

学園長の北原都美子先生は「三井先生は常に、生徒たちは未来を担う大事な存在であるとおっしゃっていました。『不易流行』ということばがありますが、不易の部分は『国際社会で通用する人間を育成する』という、本校の建学の精神だと信じています。また、三井先生が強調されていたのは、一人ひとり“違っているのだ”ということ。いろいろな国の人がいて、その多様性を認めながら子どもたちが成長していく時代は必ずくと信じていらっしやいました。グローバル



聖歌隊は歌以外にもハンドベル演奏を行います。又、校内だけでなく様々な施設での奉仕活動を多く行っています。

化が進む現在、これから先もますますその精神が重視される時代になっていくでしょう」と時代の先を見つめます。

「国際性を養うため、生徒たちの将来に必要なものをどんどん取り入れ、具体的な教育システムや授業方法を変えています。本校で育てているのは、平和を作り出す人間として、自分にできることを考え、行動に移せる生徒です。つまり『まずやってみよう』という気持ちを大切にしています。世界についても、ただ情報を収集するのではなく、自ら理解に向かう姿勢を尊重し、そういう気概のある生徒たちを受け入れる体制を積極的に整えています」(内藤先生)

## 一般生と国際生が交流し、互いに刺激し合える環境でより高みを目指す教育！

一般生と国際生は、一緒のホームルームクラスで生活を共にしています。そのため、国際生の積極性や高い語学力、さらに異文化を肌で知る経験などは、一般生に大きな刺激を与えています。

「休み時間などにも英語が飛び交う環境ですが、ことばがわからないからとコミュニケーションをあきらめるといった生徒はいません。本校にはもともと『互いを認め合う』という土壌があり、生徒同士がいい意味で感化し合っています。早く自分も高い語学力を身につけたいという思いから、一般生同士も積極的に英語で会話しています」(内藤先生)

国際生でも英語圏ではなかったり、現地の日本人学校に通っていたりと、生徒たちの語学力は実にさまざま。そのため英語の授業は、一般生3クラス、国際生は2クラスの5段階の習熟度別で行われており、英語初心者でも安心して授業に臨むことができます。「話す・読む・聞く・書く」の4技能の習得はもちろん、



英会話の授業はチームティーチング。日本人教員も帰国子女や留学経験者で、高い英語力を持っています。

コミュニケーションスキルを高め、物事を論理的に伝えるための「考える」技能も合わせた「5技能」を高める授業を展開。教科書は2学期のうちに終わらせ、3学期は洋書を読んだり、スピーチを行ったりするなどの取り組みを行っています。

成果を確認するために、中3～高2の一般生は、毎年 TOEFL Junior を受験しており、中3は37%、高2では61%の生徒が英検準2級レベルを表す実力に到達しています。(国際標準規格「CEFR」A2以上)

また、高校2年生からは、第二外国語としてフランス語、中国語、コリア語の選択も可能です。

帰国生に対する教育としては、日本語が苦手あるいは話せない生徒もいるため、国数理社で取り出しの授業が行われ、丁寧な指導がなされています。また、言語力の保持・伸長のためのドイツ語、フランス語、スペイン語、中国語、コリア語の授業も用意されています。

啓明学園では何よりも基礎学力を着実に身につけることを重視しており、教科ごとの綿密なサポートのほか、朝学習や放課後の自習室の開放など、生徒たちはそれぞれの理解度と意欲に応じて、しっかりと学習に取り組める環境が整えられています。2014年度からは中3以降で学力上位者クラスを設け、より高みを目指す生徒たちをサポートしています。

## 文科省指定スーパーグローバルハイスクールアソシエイト校としての様々な取り組み！

これまでの国際理解に関わる教育実践が認められ、2014年度よりスーパーグローバルハイスクールアソシエイト校に認定された啓明学園。「世界市民としての必要十分な資質を育てる」教育方針から、広い視野と独自の見識を持つ生徒を育成するために、様々な取り組みを通して「世界を学ぶ」「世界に触れる」「世



カンボジアワークキャンプ。発展途上国への訪問とフェアトレードの実践を通じて平和に寄与することを具体的に学びます。



毎年3学期に行われる中学の「国際理解の日」では、それまで学習してきた内容を発表し、テーマに合う講師を招いています。

界のために行動する」ようにしています。

毎年冬に実施されるイベント「国際理解の日」に加え、毎学期に実施するワークショップやグローバル講演などを通じて、調べ学習やディスカッション、プレゼンテーションを重ね、生徒一人ひとりが自らの考え方や他者への理解を深めていきます。

さらに、2016年度から実施される大幅なカリキュラム改訂では、いままで実施していた高3選択授業「国際理解」に加え、中3から全員必修の「グローバルスタディーズ」という授業が開始されます。

また同校には姉妹校や交流校がアメリカ、オーストラリア、アイルランド、中国、モンゴル、ドイツなどに計8校あり、短期・長期の留学制度を整備。中2以降では5月と8月の年2回、希望者にオーストラリアやアメリカ、アイルランド、ドイツなどへの海外体験学習のチャンスが整えられています。

また、「世界のために行動する」ための具体的プログラムとして、2014年から、高校生から参加できる「カンボジア ワークキャンプ」を実施しています。日本のNPOの協力の下でカンボジアの最貧困地域の学校を訪問し子どもたちと交流します。そして、お母さんたちに日本から持参した布きれを渡して裁縫品の



カンボジアでは有志の募金活動により、バスケットゴールを寄贈。ゲームの方法やルールも教えました。



年に2回の海外体験学習が実施されています。オーストラリア・アメリカ・ドイツ・アイルランドなど

制作を依頼。制作物は学園のバザーや文化祭で販売してその収益を子どもたちの就学資金に充ててもらおうようにしています。

さらに生徒からの発案として、生徒・地域の方からの募金によって集めた資金でバスケットゴールを購入、現地の子どもたちにバスケットボールの仕方を指導することも行いました。

「私たちはその場のぎではなく、自立を促すような支援や文化理解に取り組んでいます。非常にうれしいのは、こういう活動を大学生になっても続けている卒業生が多いということです。私たちも啓明だけで終わるのではなく、将来的に継続できる姿勢を育みたいと考えています。常に疑問と課題を持ち、それに立ち向かうことは、その子の人生の命題となるものです」と学園長の北原先生。

啓明学園では、このように多くの国の人々との交流を通して、互いを理解し合える“心”を育む環境が用意されています。また2016年度より、高校では茶道の授業が実施され、中学でも日本文化に触れる機会を増やす予定です。日本の誇る文化を早い段階で学び、自国への理解をより深めることは、世界を知るための近道となっているようです。

## 生徒に寄り添う進路指導が、夢を現実へと引き寄せる！

啓明学園で常に意識されている「自分の考えを発信する」、「行動につなげる」という教育は、生徒たちの進路や大学の選択にも大きな役割を果たしています。

「進路については、やりたいことや自分の生き方から考える指導を行っています。生徒たちの夢に私たち教員が寄り添っているとのお考えいただければ良いでしょう」と北原先生。

今春、啓明学園の卒業生（114名）が合格した学

部や学科を見てみると、工学部（東京工業大学）、総合政策学部（慶応義塾大学）、総合グローバル学部（上智大学）、経営科学（横浜市立大学）、農学部（明治大学）など、その進路選択先は多岐に渡り、学内外での豊かな経験が反映されていることがわかります。

GMARCH以上の現役大学合格者数は計42名で、37%という高い合格率を誇ります。特に上智大学へは9名（8%）の合格者を輩出。国際生だけでなく、一般生も多く進学しています。ハワイ大学やアーカンソー州立大学、モスクワ大学などの海外大学への合格者も今春は8名（7%）おり、例年海外大学進学も視野に入れている生徒が多いようです。

また啓明学園では国際基督教大学や上智大学、青山学院大学など、キリスト教系大学を中心に指定校推薦枠が多数用意されています。AO入試や推薦入試で合格のカギとなるのが、入学への思いや自分の経験、将来展望を十分に伝えられるかということ。中学時代からレポートをまとめる作業は日常的に行われ、高校では小論文のための指導が熱心に進められています。

「本校の生徒たちは、活動報告書やレポートなどもサッと書いてしまいます。自分のことばと若い感性で表現して文章は的確にまとめられており、生徒たちのプレゼン力の高さが伺えます」と内藤先生。生徒たちの表現力の豊かさに目を見張るものがあると、感慨深げでした。

このように少人数制による温かな校風のなか、豊富な経験と異文化体験を積みながら、生徒たちは自分自身の夢の実現のために邁進しているのです。

最後に「学校にとって生徒と教員は宝物」と話す北原先生の笑顔が印象的でした。

また2月18日（木）には、小中高12年一貫教育の英語スピーチコンテストが八王子のオリンパスホールで行われます。今年度から初めて一般公開形式で開催されるので、生徒たちのプレゼン力の高さを観るために、是非足を運んでみてください。



大学進学に向けた指導強化は日常のこと。